岩手日報　2011年5月11日（水）

日報論壇

効いていた田老の防災

元田良孝

東日本大震災は、想定を超えた津波で多くの自治体が壊滅的な被害を受けた。中でも宮古市田老地区は、戦前から津波に強い町づくりをして、わずか人口5千人弱の地域に延長2433㍍にも及ぶ高さ10㍍の防潮堤を備えた。

世界的にも津波防災の町として有名な地区であったが、明治三陸大津波をはるかに越える19㍍にも及ぶ津波でやはり被災してしまった。

1933年の昭和三陸大津波で被災した旧田老村の関口松太郎村長は、いち早く防浪堤構想を立ち上げ、貧しい財政の中から村費単独で防潮堤建設を開始し、県、国を動かして58年には町を取り囲む防潮堤を完成させた。

田老地区ではハード面だけでなく、避難訓練や災害の語り継ぎによりソフト面の対策も怠ってこなかった。

大津波で繰り返し壊滅されてきた地区の再生に賭けた情熱は高く評価される。しかし、その努力をあざ笑うように、今回の津波は全てを破壊してしまったように見える。

だが、よく見ると田老の努力は無駄ではなかったと思う。今回破壊されなかった第1防潮堤は、その内側は越えてきた津波により家屋は破壊されたが、防潮堤自身が破壊された第2防潮堤の内側が何も残らなかったのに対し、相対的に被害は軽減されている。防潮堤により避難の時間もできたと思われる。

田老は1896（明治29）年の津波では1859人の死者・行方不明者をだし、集落の49・3％が犠牲となった。昭和三陸大津波では死者・行方不明者は911人、17・8％であったが、今回の津波では200人、4・1％にとどまった。

もちろん200人と言う貴い命が失われた事実は重い。今回の津波が、平日の日中で避難もしやすかったという条件の差もあるが、犠牲者の割合は確実に下がってきており、防災の効果があったと思われる。

田老は負けなかったのだ。

今後、復興のための街づくりが沿岸自治体で検討されると思う。私は、政府の掲げた高地移転だけが解決法とは思わない。今回の津波規模に対応する巨大な防潮堤を設けるべきだとも思わない。

海は時には牙をむいて災いをもたらすが、それ以外の期間は多くの恵みをもたらしている。津波は自然の摂理で、避けることはできない。この地に住み、津波と共存してゆかなければならない。

既存の津波防災の効果検証を行い、ある程度の津波は防潮堤で守り、それ以上の災害には避難や保険で対応するシステムを早急に構築すべきである。災害と賢く共存する知恵を私たちは持っているはずである。

（盛岡市　大学教員　60歳）